

# 漁海況年報

平成23年1月1日～12月31日

静岡県水産技術研究所  
(電話 054-627-1815)

静岡県水産技術研究所伊豆分場  
(電話 0558-22-0835)

## 〔黒潮流路〕

図1に黒潮流型の区分を、表1に近年の流型の経過を示した。また、図2には平成23年1～12月における月別の前半、後半の代表的な黒潮流路を示した。平成23年の黒潮流路は、全般的に遠州灘沖33°Nを東進するN型基調で経過したが、小蛇行の通過に伴い2～4月、5～6月、7～8月、9～10月にB、C型となり、離接岸の変動が大きかった。また、流路の変化に伴い沿岸域に頻繁に暖水が波及した。2月中旬～4月中旬は比較的明瞭な蛇行を示し、蛇行の南端は32.5°N以南まで達した。5～10月は一時的にB、C型になることはあったが、蛇行の規模は小さく短期間に流路が変化した。11月以降はN型で接岸傾向が強まった。

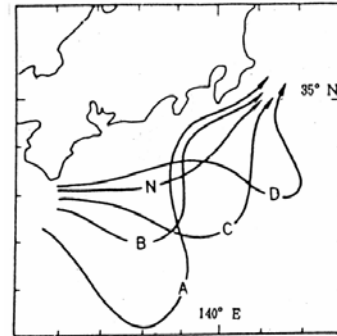


図1 黒潮流型の区分  
(海上保安庁海洋情報部より)

表1 黒潮流型一覧表

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成元	B	C	C	C	DW	C	N	N	N	N	N	N
2年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	AC	C
3年	C	C	C	C	C	C	C	CD	C	C	C	C
4年	C	DC	N	N	N	N	BD	C	DN	N	N	NC
5年	N	N	N	N	N	B	B	BC	C	C	C	C
6年	B	C	D	N	N	N	C	C	NN	N	N	N
7年	N	N	N	N	N	N	B	B	C	C	C	D
8年	C	D	D	D	W	D	N	N	N	N	N	N
9年	N	D	D	D	C	C	C	CW	D	ND	N	D
10年	D	C	N	N	D	N	NW	N	N	N	NB	B
11年	C	W	WB	C	C	C	C	C	N	N	N	N
12年	C	C	CW	W	W	WB	B	BC	CW	WB	C	C
13年	C	C	C	C	CD	C	C	C	WN	B	C	C
14年	N	N	N	N	N	N	N	N	NB	N	N	N
15年	N	N	N	N	N	D	NW	WN	B	BC	D	N
16年	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	NA	A
17年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	C	C	C
18年	N	N	N	NB	C	CW	CN	N	N	N	N	N
19年	N	BC	D	B	B	C	C	C	C	C	N	B
20年	C	C	N	N	N	N	N	B	C	C	C	C
21年	C	C	C	C	C	C	CW	WB	C	C	C	C
22年	D	DN	N	BC	N	NW	WB	C	CD	D	N	N
23年	N	N	N	B	B	CW	C	DW	N	BC	C	DN
24年	N	N	N	B	C							

\* 静岡県水産技術研究所一部改変

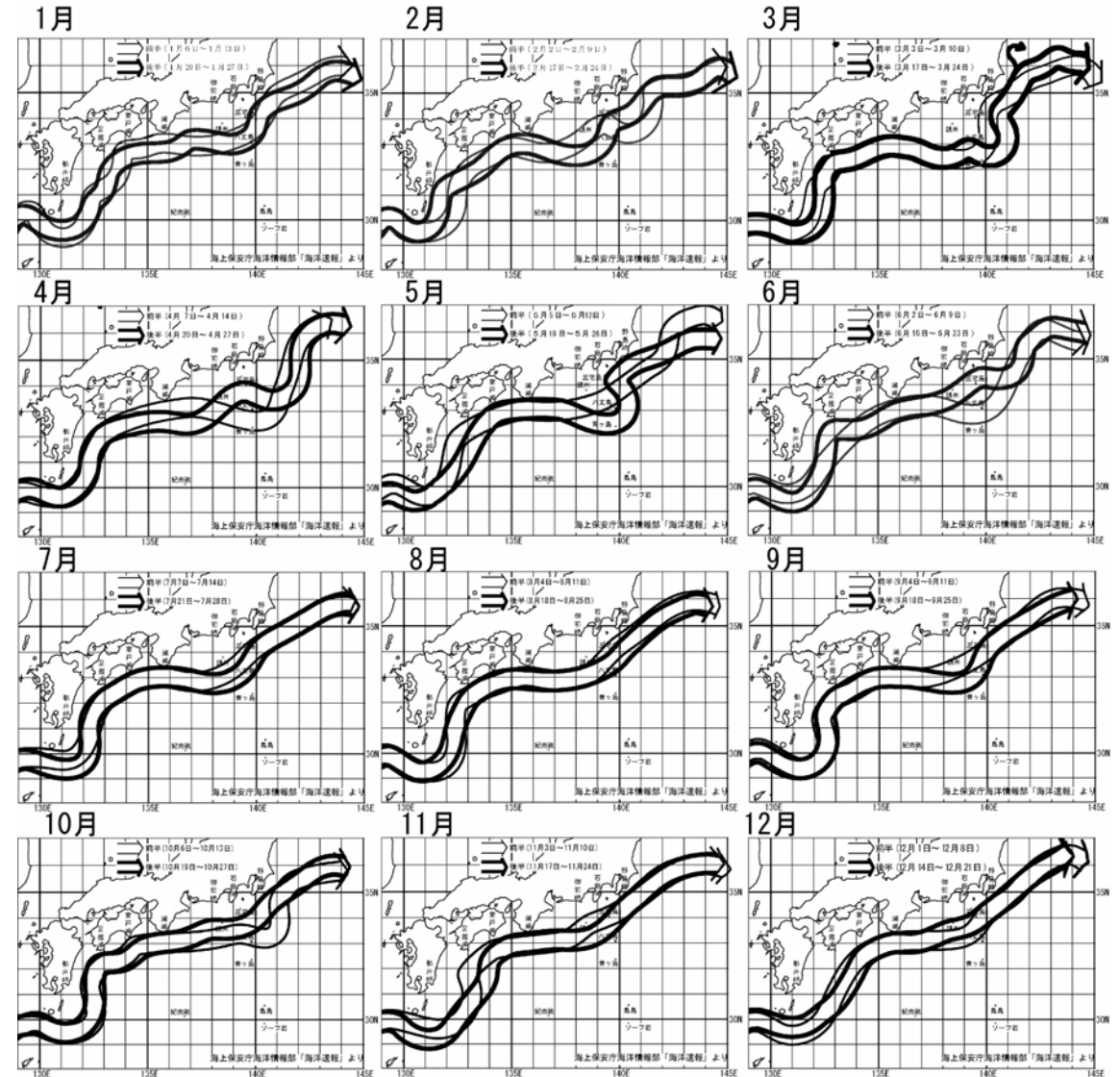


図2 黒潮流軸の変動 (海上保安庁海洋情報部「海洋速報」より) 前半 後半

[県下沿岸域]

図3に平成23年1~12月の沿岸水温の変化を旬別に示した。1月の定地水温は「**平年並~低め**」であったが、2月上旬の暖水波及の後は、駿河湾では3月上旬まで、相模湾側では4月上旬まで平年より高めで推移した。その後、5月下旬までは「**平年並~やや低め**」となった。5月中旬から8月上旬は、沿岸湧昇や台風通過により一時的な水温低下がみられたものの、暖水波及が多く全般的に平年より高めで経過した。8月下旬から9月上旬には、駿河湾で平年より低めとなったが、9月上旬の暖水波及により相模湾側では9月下旬まで高めとなった。10月は、中旬から下旬に暖水波及がみられたものの、概ね平年並みであった。11月以降は、黒潮の接岸傾向が強まり、沿岸水温は「**やや高め**」~「**きわめて高め**」で推移し、焼津では12月下旬まで高めの水温が継続した。

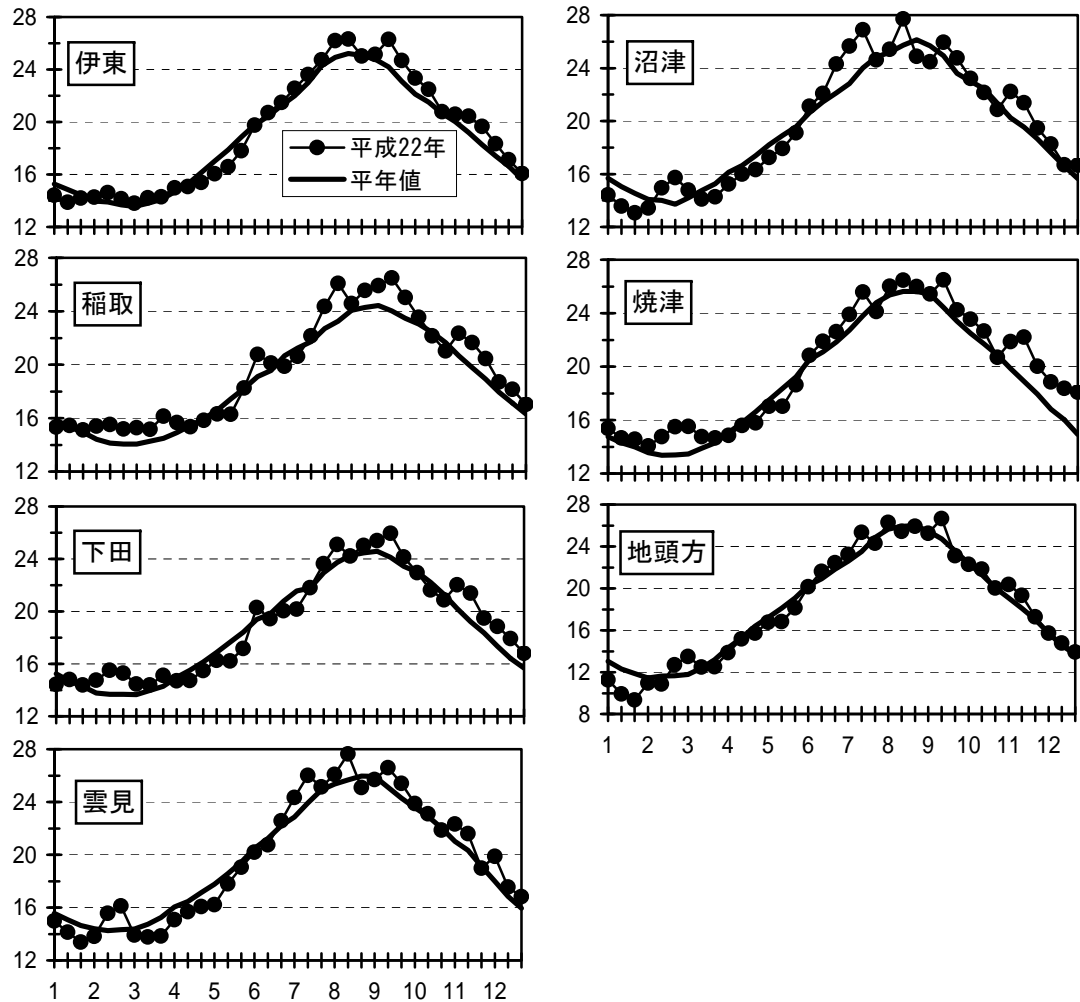


図3 平成23年1~12月の旬別沿岸水温の変化  
(縦軸は水温、横軸は月を示す)

[サバたもすくい棒受網]

1 たもすくい

伊豆諸島海域におけるたもすくい操業は、1月10日に三本でゴマサバを対象に始まった。マサバ漁場は、2月7日に暖水波及のあったひょうたん瀬で形成されたが、水温の低下に伴い、3月下旬には大室出しに移り数日間持続した。その後のマサバ漁場は、4月上旬に暖水波及のあった三本を含む三宅島周辺海域に移行し4月下旬まで継続した。4月下旬の伊豆諸島北部海域への暖水波及に伴い、マサバ漁場は大室出しに移ったが、5月下旬の強い暖水波及により解消した。6月以降、マサバの漁場形成は見られず、下旬まで三宅島周辺海域でゴマサバ対象の操業が行われた。本漁期の特徴として、前2年に引き続き三宅島周辺海域にマサバ漁場が形成されたことが挙げられるが、これはマサバ産卵群の増大による産卵場の拡大を表している可能性も考えられた。

マサバは尾叉長30~40cmの群が漁獲の主体となり、モードは32cm次いで36cmに見られた。また、30cm未満の小型魚も漁獲された(図1)。推定した年齢別漁獲尾数によれば、卓越年級群である2004年級群に次ぐ加入水準とされる2歳魚\*1(2009年級群)のほか3歳魚(2008年級群)4歳魚(2007年級群)が漁獲の主体となった。1歳魚(2010年級群)の割合は、過去10カ年では平成17年(2005年)、平成20年(2008年)に次いで多かった。

ゴマサバは尾叉長26~35cmの群が漁獲の主体となり、モードは29cmに見られた(図1)。推定した年齢別漁獲尾数によれば、卓越年級群である2004年級群に次ぐ加入水準とされる2歳魚(2009年級群)が漁獲の主体となった。

1~6月の千葉県・神奈川県・静岡県主要7港\*2におけるたもすくい水揚量は、マサバが2,158トンで前年(891トン)の242%、ゴマサバが1,471トンで前年(902トン)の163%であった。特にマサバについては、期間中の1日1隻あたり水揚量が9.0トンで、近年では好漁であった平成19年(2007年:5.8トン)を上回り、平成元年(1989年)以降で最高となった。マサバ、ゴマサバとも水揚量が前年を上回った理由として、両種とも2歳魚の来遊水準が高かったこと等が考えられた。

\*1 年齢は1月に加齢し、平成23年(2011年)時のものを示した。

\*2 千倉・富浦(千葉県)、三崎・長井(神奈川県)、伊東・沼津・小川(静岡県)の7港。

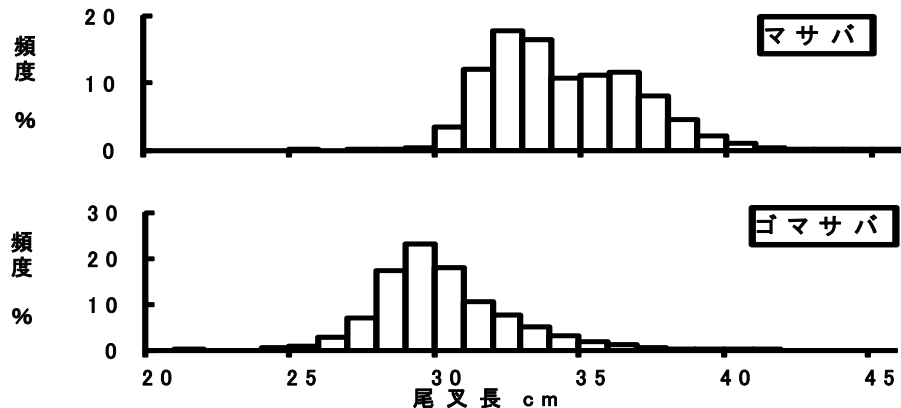


図4 平成23年1~6月のたもすくいによるマサバ尾叉長組成(上)とゴマサバ尾叉長組成(下)

2 棒受網

伊豆諸島海域における棒受網操業は、1月11日から始まった。静岡県棒受網船は、ほぼ年を通じて三本、三宅など三宅島周辺海域でゴマサバ主体の操業を行ったが、7月上旬、9月下旬、11月下旬にはひょうたん等へ、9月上旬には銭洲へも出漁した。また、2月下旬～3月下旬頃にはマサバ狙いのためたもすくい操業へ転換し、ひょうたん、大室出しに出漁した。平成23年の静岡県主要4港\*3における棒受網（一部たもすくいも含み、以下同じ。）の1日1隻あたりゴマサバ水揚量は20.8トンで、前年（22.3トン）の93%、平成20年（20.0トン）の104%であった。経月変化をみると、7～11月は前2年を下回って推移した。

漁獲されたゴマサバの7～12月（1～6月はたもすくいとはほぼ同じ）の尾叉長範囲は21～42cmであり、尾叉長組成は7月は28cmモードの単峰、8～12月は28～30cmと24～26cmにモードを持つ二峰で経過した。年間における30cm以上の個体の尾数割合は、4月と11～12月に高く40%を超えた。年間の年齢別漁獲尾数によれば、0歳魚（2011年級群）が8%、1歳魚（2010年級群）が29%、2歳魚（2009年級群）が60%、3歳魚（2008年級群）以上は3%に満たず、2歳魚（2009年級群）が漁獲の主体となった。

静岡県主要4港における棒受網の水揚量は、マサバが2～5月を中心に1,355トンで前年（474トン）の286%、ゴマサバが10,709トンで前年（12,128トン）の88%であった。ゴマサバ水揚量が前年を下回った理由として、2歳魚の来遊水準は高かったものの、7月、9月における漁場への黒潮の接近、10～12月におけるモロ（むろ：尾叉長18～21cmモード）の混獲の増加等が考えられた。マサバ水揚量が前年を上回った理由として、たもすくいに同じく2歳魚の来遊水準が高かったこと等が考えられた。

\*3 伊東、静浦、沼津、小川の4港。

3 小川港におけるサバ類単価

小川港における棒受網（一部たもすくいも含む）のサバ類月別単価は、マサバが169～450円/kg（2～6月）、ゴマサバが48～62円/kgであった。水揚の主体となったゴマサバについては、2～11月を通じ50円/kgを上回り、年後半においても比較的堅調に推移した。この理由として、年後半における水揚量の減少、比較的大型の2歳魚が主体となったこと等が考えられた。

表2 小川港（焼津市）における棒受網・たもすくいのサバ類月別単価(円/kg)

年	魚種	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成18年 (2006)	マサバ	—	—	64	118	61	—	—	—	—	—	72	56
	ゴマサバ	52	48	53	68	43	60	62	40	38	49	49	41
平成19年 (2007)	マサバ	129	236	185	156	124	140	184	—	—	—	—	—
	ゴマサバ	50	53	51	71	72	57	74	60	58	63	80	95
平成20年 (2008)	マサバ	—	315	489	315	173	—	—	—	—	—	—	—
	ゴマサバ	98	96	92	83	78	90	72	61	51	48	56	58
平成21年 (2009)	マサバ	—	486	405	169	108	—	—	—	—	—	—	—
	ゴマサバ	53	75	56	56	56	56	54	50	38	36	36	37
平成22年 (2010)	マサバ	359	249	260	126	231	253	204	—	—	—	—	—
	ゴマサバ	71	61	79	63	63	66	57	42	36	39	37	39
平成23年 (2011)	マサバ	—	216	225	169	280	450	—	—	—	—	—	—
	ゴマサバ	48	54	58	62	62	58	56	51	54	54	53	48

【サクラエビ船曳網】

春漁は4月5日夜～6月5日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は13日、漁獲量は721トンで、漁場は主に沼津沖に形成された（前年の出漁日数は15日、漁獲量は640トン）。漁獲されたサクラエビは、平均体長36.9mmの当歳エビ（前年は35.5mm）と平均体長42.1mmの1歳エビ（前年は41.1mm）で当歳エビが主体であった。

秋漁は10月31日夜～12月21日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は13日、漁獲量は358トンで、漁場は主に大井川から榛原沖に形成された（前年の出漁日数は10日、漁獲量は303トン）。漁獲されたサクラエビは、平均体長32.9mmの当歳エビ（前年は31.9mm）と平均体長40.6mmの1歳エビ（前年は40.8mm）の2群で構成された。

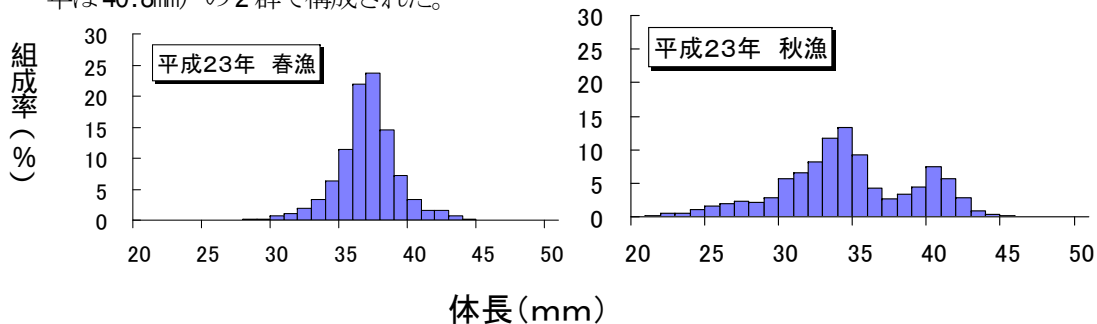


図5 平成23年春・秋漁のサクラエビ体長組成

【竿釣近海カツオ】

・水揚量と魚価

静岡県主要5港（沼津、清水、焼津、小川、御前崎）における近海・沿岸竿釣り船の水揚量は、2,570トンで平成22年の1,492トンを上回り、過去5か年平均（1,865トン）の138%であった。魚価は398円/kgで平成22年の429円/kgを下回った。

・漁況（漁場形成と魚体）

近海竿釣り船のQRY、御前崎港での市場調査による小笠原と伊豆諸島周辺の漁況はおおむね下記のとおり推移した。

- 1 月 小笠原諸島海域でカツオを漁獲し、1月27日に水揚げされたカツオは44cmにモードがあった。
- 2 月 小笠原諸島周辺で中・大（尾叉長57cmモード）、小（尾叉長45cmモード）、特特大・特大（尾叉長73cmモード）カツオを漁獲した。
- 3 月 小笠原諸島周辺からその西側で大・中（尾叉長58cmモード）、特大・特特大（尾叉長72cmモード）、小・極小（尾叉長44cmモード）カツオを漁獲した。
- 4 月 20°～32°N、136°～141°Eで小・極小（尾叉長43cmモード）、大・中（尾叉長59cmモード）カツオを漁獲した。
- 5 月 31°～34°N、138°40′～140°10′Eで小・極小（尾叉長45cmモード）カツオを主体に漁獲した。
- 6 月 30°～34°N、138°～140°Eの鳥島からゼニスにかけて小・極小（尾叉長44cmモード）、中カツオを漁獲した。
- 7 月 32°30′～33°30′N、139°～140°Eの新黒瀬から青ヶ島周辺にかけて小（尾叉長45cmモード）を主体に特大・大（尾叉長67cmモード）カツオを漁獲した。
- 8 月 32°30′～34°10′N、139°35′～140°10′Eの三宅島から青ヶ島にかけて、小（尾叉長

- 46cmモード)、特大(68cmモード)、チン(36cmモード)カツオを漁獲した。
- 9月 33° 30' N、140° E 付近の新黒瀬等で、小(尾叉長46cmモード)、特大(尾叉長70cmモード)、チン(尾叉長36cmモード)カツオを漁獲した。
- 10月 33° 50' ~34° 25' N、138° 40' ~139° E 付近の銭州からひょうたん瀬にかけて、大、中(尾叉長58cmモード)、特大・特特大(尾叉長72cmモード)、極小・小(尾叉長42cmモード)カツオを漁獲した。
- 11月 31° ~33° 20' N、139° ~140° E 付近の松生場からひょうたん瀬で極小(尾叉長39cmモード)、中・大(尾叉長57cmモード)、特特大・特大(尾叉長73cmモード)カツオを漁獲した。
- 12月 水揚げはなかった。

表3 平成23年近海釣り船のカツオ水揚量等 (県内主要5港)

年月	水揚量 (トン)	水揚隻数	水揚/隻 (トン)	平均単価 (円/kg)	主漁場と魚体 (体長cm)
23年1月	25	3	8.3	444	小笠原諸島周辺 (44cm)
2月	327	21	15.6	448	小笠原諸島周辺 (45、57、73cm)
3月	294	32	9.2	431	小笠原諸島周辺 (44、58、72cm)
4月	369	27	13.7	432	伊豆・小笠原諸島周辺 (43、59cm)
5月	563	77	7.3	323	伊豆諸島周辺 (45cm)
6月	289	48	6.0	361	伊豆諸島周辺 (44cm)
7月	300	64	4.7	372	新黒瀬～青ヶ島 (45、67cm)
8月	128	42	3.0	530	三宅島～青ヶ島 (36、46、68cm)
9月	110	19	5.8	339	新黒瀬等 (36、46、70cm)
10月	39	18	2.2	513	銭洲～ヒョウタン瀬 (42、58、72cm)
11月	126	49	2.6	446	松生場～ヒョウタン瀬 (39、57、73cm)
12月	0	0	—	—	
23年計	2,570	400	6.4	398	
22年計	1,492	394	3.8	429	
5か年平均	1,865	446	4.2	411	平成18～22年の平均

[まき網]

1 マイワシ

静浦漁港における総水揚量は4.2トンで、前年(76.7トン)の5%、平年(過去5か年平均:26.5トン)の16%であった。平年の主漁期は6～7月であるが本年は水揚げが激減した。

沼津港における総水揚量は3,751.3トンで、前年(1,624.1トン)の2.3倍、平年(過去5か年平均:989.5トン)の3.8倍と好調であった。1、2月と10月に水揚げがまとまった。特に10月は当歳魚中心に2,240.4トンが水揚げされ、総水揚量の60%を占めた。

小川港における総水揚量は1,946.3トンで、前年(1,096.2トン)の1.8倍、平年(444.8トン)の4.4倍と好調であった。1～3月と10月に水揚げがまとまり、この4ヶ月で総水揚量の97%を占めた。

1～3月は被鱗体長20cm前後の銘柄大羽が主体であったが、10月は被鱗体長19cm前後の銘柄大羽と被鱗体長14cm前後の銘柄小平(当歳魚)が混じって漁獲された。

伊東港における総水揚量は716.0トンで、前年(1,873.6トン)の38%、平年(584.9トン)の1.2

倍であった。8～9月、11～12月に100トン以上の水揚げがあった。この4ヶ月で総水揚量の89%を占めており、他の水揚地に比べ水揚げ状況が異なった。

2 カタクチイワシ

本年の静浦漁港における総水揚量は34.5トンで、前年(583.3トン)の6%、平年(731.4トン)の5%と、前年、平年を大きく下回った。平年の主漁期は5～6月であるが本年は水揚げが激減した。

注) 平年: 過去5か年平均

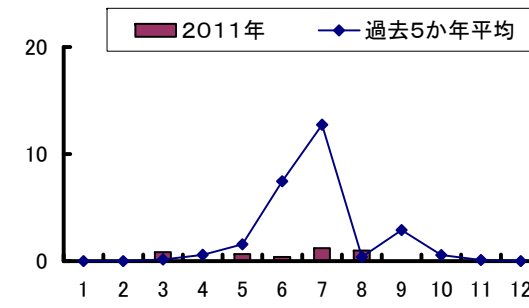


図5 静浦漁港マイワシ月別水揚量の推移

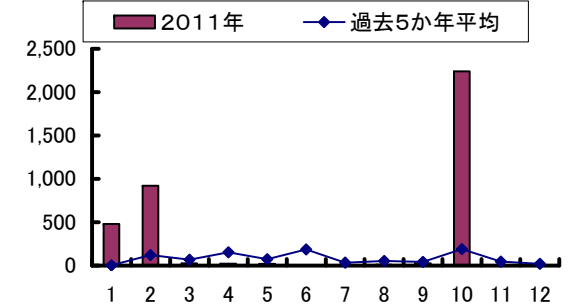


図6 沼津港マイワシ月別水揚量の推移

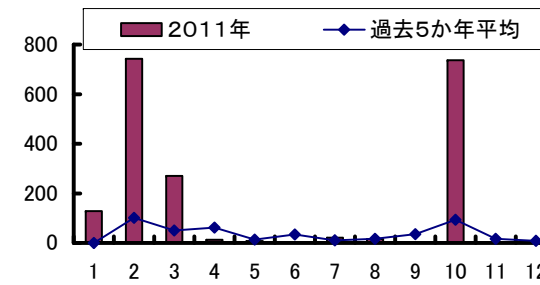


図7 小川港マイワシ月別水揚量の推移

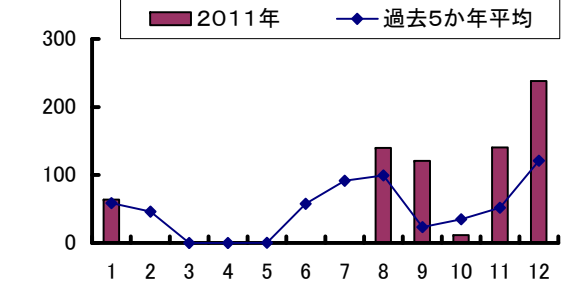


図8 伊東港マイワシ月別水揚量の推移

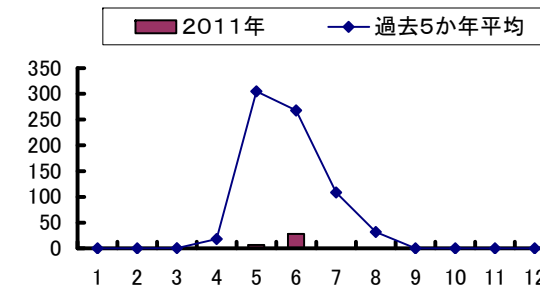


図9 静浦漁港カタクチイワシ月別水揚量の推移

(注) 図5～9の縦軸は水揚量(トン)、横軸は水揚月

**[シラス船曳網]**

シラス漁は3月22日から始まった。3～12月の主要6港（静岡、吉田、御前崎、遠州、舞阪、新居）における総水揚量は8,022トンで、前年（6,403トン）の125%、平年（6,890トン）の116%と、前年、平年を上回った。総水揚金額は4,086,019千円で、前年（3,880,634千円）の105%、平年（4,078,487千円）の100%と、前年並み、平年並みであった。平均単価は509円/kgと前年（616円/kg）の84%、平年（598円/kg）の85%だった。

1日1か統当りの水揚量の推移を月別にみると、3月は498kg（駿河湾114kg、遠州灘952kg）、4月は506kg（駿河湾288kg、遠州灘669kg）といずれも平年（3月：210kg、4月：302kg）を上回った。海域別に見ると駿河湾では平年を下回っていたが、遠州灘では3月から盛漁期の目安である400kgを超え、好漁であった。5月に入ると駿河湾でも好転し、703kg（駿河湾682kg、遠州灘711kg）と平年（551kg）を上回った。6月は458kg（駿河湾170kg、遠州灘572kg）と平年（573kg）を下回り、特に駿河湾では不漁となった。7月に入ると再び駿河湾でも好転し、673kg（駿河湾667kg、遠州灘675kg）と平年（358kg）を上回り、以降11月まで平年を上回る状況が続いた。8月は447kg（駿河湾499kg、遠州灘407kg、平年：420kg）、9月は411kg（駿河湾421kg、遠州灘405kg、平年386kg）、10月は508kg（駿河湾516kg、遠州灘505kg、平年295kg）、11月は256kg（駿河湾209kg、遠州灘208kg、平年153kg）であった。12月は129kg（駿河湾81kg、遠州灘193kg）で、平年（127kg）並みであった。

水揚量の推移を月別にみると、3月は157トンで平年同期（138トン）の114%、4月は646トンで平年同期（635トン）の102%、5月は1,522トンで平年同期（1,372トン）の111%で、3～5月までは平年並みであった。6月は792トンで平年同期（1,327トン）の60%と落ち込んだが、7月は1,572トンで平年同期（712トン）の221%と回復した。8月は760トンで、平年同期（827トン）の92%、9月は778トンで平年同期（893トン）の87%と平年を下回って経過したが、10月は1,241トンで平年同期（658トン）の189%、11月には468トンで平年同期（228トン）の205%と平年を上回った。12月には86トンで、平年同期（100トン）の86%であった。

平均単価は漁期を通して、平年を下回った。単価低迷の要因として、昨年の在庫を加工業者が抱えていたこと、解禁時にはカエリサイズが多かったこと、5月、7月、10月は水揚量が多かったことが考えられる。

今漁期の特徴としては、解禁当初はマシラス主体で経過したこと、4月下旬以降の黒潮系暖水の波及や黒潮内側反流の発達とともにカタクチシラスが主体となったこと、5月末までの漁況経過から今漁期は初夏不調パターンと予測され、そのとおり6月には落ち込んだこと、7月以降11月まで8月を除き好漁であったことがあげられる。7月の漁況好転は黒潮の接岸のほか、5月の卵発生量が多かったことも一因と見られる。8月は台風により、操業日数が少なかった。9月下旬より黒潮内側反流が発達するとともに秋シラスが好調になり、11月まで継続した。

注) 平年：過去5か年平均

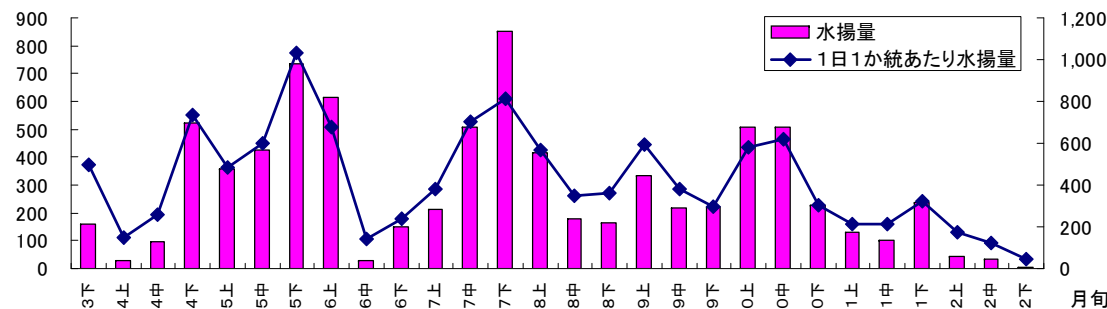


図10 平成23年主要6港旬別シラス水揚量と1日1か統あたり水揚量の推移

**[定置網]**

伊豆半島東岸大型定置網7か統（伊豆山、古網、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津）の漁獲量は5,256トンで、前年漁獲量5,209トンと同量、平年漁獲量（昭和57年～平成22年平均）3,936トンの1.3倍でした。月別に漁獲量をみると、1、6月と10～12月に平年を大きく上回る漁獲がみられました。

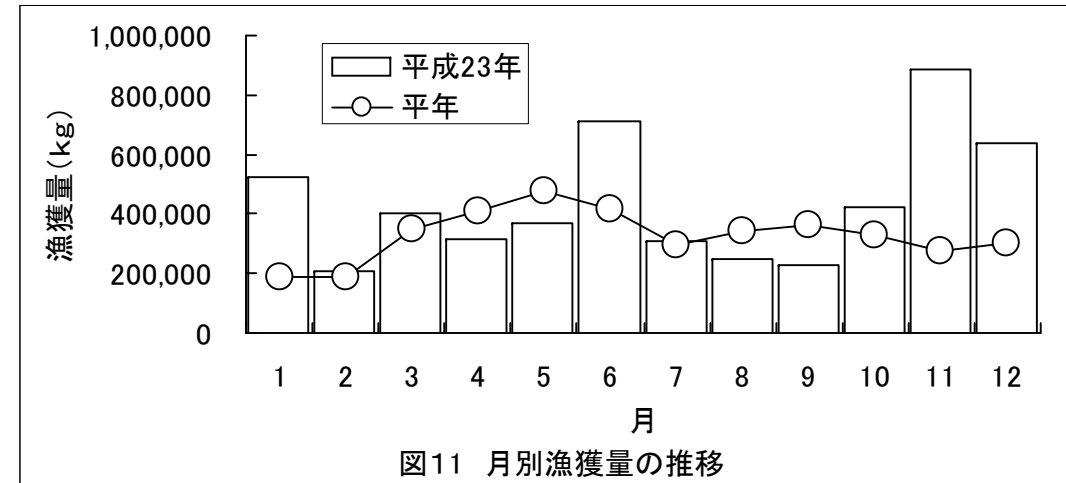


図11 月別漁獲量の推移

また、漁場別の漁獲量では富戸、赤沢、北川、谷津漁場で前年を上回り、北川、古網、川奈漁場の順に多く漁獲されました。

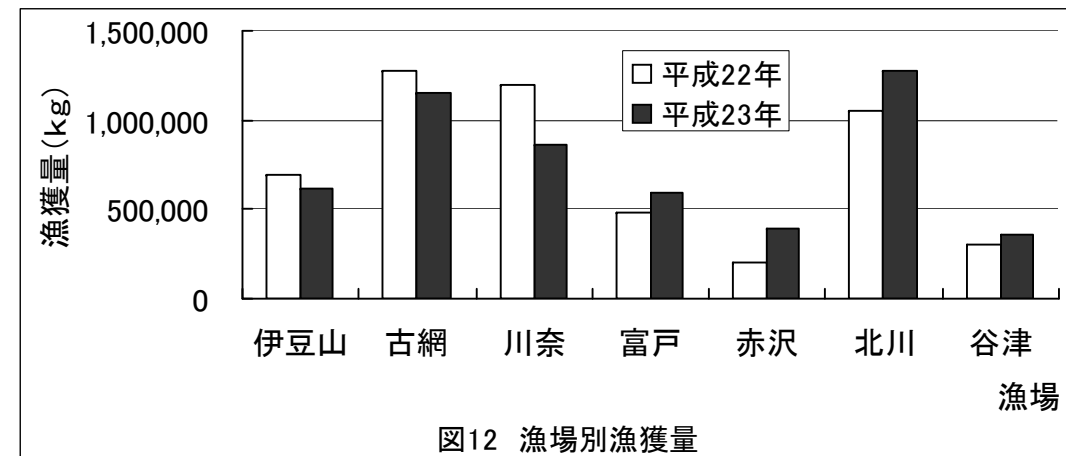


図12 漁場別漁獲量

魚種別の漁獲量ではサバ類、カタクチイワシ、スルメイカなどが多く漁獲され（表1）、中でもモロやウルメイワシが前年および平年を大きく上回って漁獲されたことが特徴の一つでした。

表4 多獲された魚種の漁獲量

魚種	漁獲量 (トン)	前年比	平年比
サバ類	1,624.4	1.0	1.7
カタクチイワシ	880.6	1.0	2.5
スルメイカ	514.4	1.8	3.1
マルソーダ	451.9	0.5	2.0
モロ	295.8	5.2	10.8
マアジ	294.5	0.9	0.4
ウルメイワシ	191.4	6.5	3.5
シイラ	169.2	8.2	3.4
ブリ	168.0	1.2	2.9
マイワシ	86.9	0.6	0.2

主要魚種であるブリは、2009年に発生したワラサ（平成23年時2歳魚）の資源水準が高かったことから漁獲量が増加し、年間の漁獲量は前年、平年を上回る結果となりました。

また、0～1歳魚が漁獲の主体となったマアジは、0歳魚（2010年に発生した群）、1歳魚（2009年に発生した群）の資源量が少なかったことから漁獲量は前年、平年を下回る結果となりました。

サバ類（ゴマサバ主体）の漁獲量は、1,624トンで前年、平年とほぼ同量の漁獲がみられましたが、うち、マサバは41トン（前年比1.9）の漁獲がありました。漁獲されたゴマサバ、マサバは、いずれも1～4歳魚が主に漁獲されたため、その大きさは20～44cmと体長幅が大きかったことが特徴でした。

#### 静岡県水産技術研究所のホームページ

パソコンからは…… <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/>

携帯電話からは…… <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/mobile/>

右のQRコードをご利用ください。人工衛星NOAAの海面水温分布画像と  
関東・東海海況速報を見ることができます。

